水本さん一問一答

町では、日本カヌースプリント選手権が行われた海の森水上競技場、役場庁舎で水本さんにインタビューを行いました。水本さんは、これまでの苦難の道のりから、世界選手権での歓喜の瞬間までを振り返りながら、地元・矢巾町への思いも語りました。（**聞き手・役場広報担当**）

日本代表ウエアを着て、インタビューに臨む水本さん

――8月25日の世界選手権決勝で代表に決定した。決まった瞬間の気持ちは。

【水本】 アジア勢で同じく決勝に出場したカザフスタンに勝てば、代表に決まる場面だった。これまでの国際大会で何度も負けていた相手。最後まで気を抜けない試合が続いたので、決まった瞬間は「ほっとした」という気持ちが強かった。

――オリンピックを目標に置いたのはいつ、なぜか。

【水本】 大学に入ってから出場した、北京五輪予選では、僅差でカザフスタンに負け、出場枠を逃した。だが「目指せる位置にいる」という感覚を持った。

――そこから十数年。長い道のりだったと思うが。

【水本】 ここまで来るのに挫折はあり、「カヌーをやめたい」と考えたこともあったし、実際に半年くらい、離れた時期もあった。振り返ってみれば、それら全てが今の自分につながっている。

――「挫折」とは具体的にどういったものだったか。また、そこから再びはい上がることとなったきっかけは。

【水本】 主に気持ちの部分が原因のもの。昔からレース前はいつも不安で、「オリンピック出場は無理ではないか」といった、後ろ向きな思いを持つことがほとんどだった。さまざまな種目に挑戦しても、あと一歩のところで結果が出ないことや、練習しても長い間、努力が実らないこともあった。大学を卒業してから、オリンピックを目指すことを諦め、カヌー競技そのものを一度、完全にやめた時期もあった。

そういったときに、「もう一度やってみないか」という声を掛けてくれた人がいて、今、所属している会社に入ることになった。

――オリンピック枠を獲得できた要因は何か。

【水本】 地元である岩手や大正大学を含め、たくさんの人に支えてもらうことができ、その中で、前向きな思考を持てるようになったことが大きい。また、所属して3年目になるチョープロ（長崎県内の企業）との出合いも大きく、競技に取り組んでいく上で、強力にバックアップしてもらっている。

――オリンピック出場の決定を受け、県内でも大々的に報道された。友人、知人からの反応は。

【水本】 ＳＮＳで、何十件というお祝いのメッセージをもらった。また、インターネットで、岩手や長崎でニュースになっていることを知った。普段から、大会のたびに連絡をくれる小野先生からもお祝いの連絡をもらった。また、私の両親は、小野先生からの連絡で五輪出場決定を知ったようだった。

――町民にとって、待ちに待ったニュースとなった。母校である不来方高校の後輩を含めて、矢巾町へメッセージを。

【水本】 高校時代にカヌーを始めてから、たくさんの人に「カヌー競技」というものを知ってもらう中で、応援をいただくことができた。今は拠点を長崎に置いているにも関わらず、継続して応援してくれる方、連絡をくれる方も多くいる。そういった方々のおかげで、オリンピック出場という夢がかなったと思う。矢巾町、岩手県の皆さんに感謝したい。

出場するからには、メダルを目指す。岩手・長崎、そして日本の代表として、勇気や希望を届けられるようなレースを見せられるよう、頑張りたい。

夢に向かって前向きに努力を続ければかなう、ということを自分自身、証明できたと思う。後輩たちにも、諦めずに、夢を追いかけ、かなえてほしい。

矢巾沸く

平昌パラリンピックに出場した髙橋幸平さんと握手する水本さん

水本さんは9月10日、役場へ高橋昌造町長を表敬訪問しました。町では、それに合わせてセレモニーを企画。会場となった役場庁舎1階ホールには町民など約100人と多くの報道陣が詰め掛け、町初のオリンピック選手誕生を盛大に祝いました。

セレモニーでは高橋町長が「不断の努力を積み重ね、オリンピック出場を勝ち得たのは素晴らしいことです。町民に夢や希望を与えていただきました。水本さんはまさに、町のヒーローです」と話し、水本さんの偉業をたたえました。

藤原由巳議長は、昭和45年の岩手国体から数えて、オリンピックイヤーの来年はちょうど50年となることに触れ、「晴れの舞台に出場を決めたことは、素晴らしい快挙」と話しました。

セレモニー後の懇談には、高橋町長と村松正夫町体協会長、不来方高校カヌー部の小野幸一監督、水本さんの両親らが参加し、水本さんの学生時代から現在までの活躍などを話題に、終始、和やかな雰囲気に包まれました。

あいさつする水本さん

横断幕を手に水本さんを出迎える町民ら